

この章の主な内容

1. 合理説から快樂説へ

前の章で扱った「合理説(理屈で善を決める立場)」は、義務の尊厳を説くことはできましたが、「なぜ善を行わなければならないのか」という動機づけが弱いという欠点がありました。そこで、人間の自然な感情である「快樂」に善悪の基準を求める「快樂説」が登場します。

2. 二つの快樂説

西田先生は、快樂説を大きく二つに分けて説明しています。

● 利己的快樂説

自分の快樂を人生唯一の目的とする考え方です(代表:エピクロースなど)。自分が最大の快樂を得ることが最大の善とします。

● 公衆的快樂説(功利主義)

自分一人ではなく、社会全体の快樂を善とする考え方です(代表:ベンザム、ミル)。「最大多数の最大幸福」という言葉で知られます。

3. 快樂説への批判(ここが重要です)

西田先生は、快樂説は人間の自然な感情に基づいている点では合理説より進んでいるとしながらも、善の基準としては不十分であると批判します。主な理由は以下の通りです。

● 快樂は計算できない

ベンザムのように快樂の量を計算しようとしても、人の感情は変わりやすく、正確な基準を作るのは困難です。

● 「質の高い快樂」という矛盾

ミルは快樂に「質の差」があると言いましたが、西田先生は、もし快樂に質的な優劣(高尚な快樂と低俗な快樂など)をつけるなら、それは「快樂」以外の別の基準(人間の品位など)を持ち込んでいることになり、純粋な快樂説ではなくなると指摘します。

● 目的と結果の取り違え

ここが最も鋭い指摘です。人は「快樂を得るために」行動するのではなく、**「要求や本能を満たすために」**行動し、その結果として快樂が生まれるのだ、と説きます。

たとえば、喉が渴いた人が水を飲むのは「飲むという快樂」が目的ではなく、まず「喉が渴いた」という本能的な要求があり、それを満たした結果として快感が伴うのです。

また、理想のために苦難を選ぶような行為(自己犠牲など)は、快樂を求めているわけではありませんが、深い満足感を得ることがあります。これは「快樂＝善」では説明が付きません。

4. 結論

快樂説は、善悪の基準を「快樂の感情」に置くため、客観的な基準になりにくく、また「なぜ善をなさなければならないか」という道徳的な命令の力を説明できません。

人間は決して快樂だけで満足できるものではなく、もっと深い要求を持っているからです。

用語の解説

ここで関連する西田哲学の用語を整理しておきます。

- 意志(いし):これを選んで動かそうとする心の統一作用。西田先生は、快樂よりもこの「意志」の根底にある要求こそが重要だと考えます。

読み進めるためのヒント

この章は、西田先生が「なぜ人は生きるのか」「何が本当の満足なのか」を探求する過程で、既存の説(ここでは功利主義など)を乗り越えていこうとする場面です。

「私たちは本当に快樂だけを求めているのだろうか?」「苦しくてもやり遂げたいと思うことの正体は何だろうか?」という問いを心に留めながら読むと、次章で展開される西田先生独自の説(活動説・人格の実現)へのつながりがよく理解できるはずです。

この説明は『善の研究』本文の第三編 第八章(倫理学の諸説 その四)にもとづきます。